

# 景観フォーラム

## 巻頭言

景観という事柄を考察すればするほど、そこに住む人々の生活の仕方、習慣、作法、そしてものの考え方、というものに突き当たります。例えば、日本の引き戸と西洋の扉の違い、土足を禁ずる床の使い方、土足のままの生活、など相当な相違がみられるのではないのでしょうか。また、現代では日本語は縦にも横にも書きますが、ヨーロッパ文化では文字は基本的に横書きが通例となっております。そのような観点で景観を考えることが必要ではないかと思えます。

さて、日本景観フォーラムでは、色々な角度から景観問題を捉えるために多種多様なセミナーを開催して参りましたが、2017年度（平成29年度）から世界遺産というものに考察の対象を絞ってみようかと考えております。世界遺産として対象を捉える場合、文明そして文化という観点から考察する必要があるでしょう。そのことは、先ず、“文明としての景観”という立場からどういう考察が可能であるかということであり、次に“文化としての景観”という切り口で景観問題を捉えなおすということです。

以上のような、文明という鳥瞰的観点と文化という多様性の観点から来年度は色々な立場の方々と考察を深めて参りたいと思えますので、会員の皆様におかれましては、是非とも積極的なご参加の程をお願い申し上げます。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

### <日本景観フォーラム2016年度\*（平成28年度）年間スケジュール>

\*2016年度とは2016年4月1日⇒2017年3月31日のことです。

#### 2016年

- 4月8日（土）**景観セミナー**：2月19日（金）戸谷先生によるセミナーの第2回目 於JICA研究所
- 4月27日（水）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 6月22日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 前編』 於JICA 大会議室
- 7月2日（土）**景観まちあるき**：板橋区（御担当：豊村さん）
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）
- 9月21日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 後篇』 於JICA 大会議室
- 10月26日（水）第2回理事会 於JICA研究所
- 11月12日（土）**景観まちあるき**：世田谷（御担当：東海林さん）
- 11月30日（水）**景観セミナー**：町並みの構造 講師高山さん 於未定
- 12月14日（水）忘年会

#### 2017年

- 1月18日（水）**景観セミナー**：世界の自然保護の現状（例：ミャンマーの景観） JICA
- 2月15日（水）2016年度：景観町づくり活動のまとめと来年度への提言 於未定
- 3月 春休み（運営委員会開催予定）

#### ★景観まちあるき：

10月に予定しておりました景観まちあるき世田谷編（御担当：東海林さん）は11月12日に変更となりました。また、11月30日（水）に予定しておりました景観セミナーは都合により中止となりました。

## フィンランド共和国の景観紹介（その2）

NPO法人日本景観フォーラム 理事  
フィンランド健康福祉センター・FWBCフィンランドOy 東京事務所代表 石見茂夫

### 3. フィンランドの景観に調和した建築紹介（ホール・教会）

フィンランドの建築は日本でも多くの方々が知るアルヴァ・アールトに代表されるように、自然景観と調和したデザインと木材等の自然素材を多く活用した建築物が多く見受けられます。

ここでは景観デザインの視点から幾つかのそれらの建築物を紹介したいと思います。

度々訪問したフィンランドのメジャーな建築物のほかに、少し変わったユニークな建築物まで多くの写真を収集した中から興味を引くものを選定しました。

#### A. フィンランドディア・ホール ヘルシンキ市

首都ヘルシンキの中心にあるこのホールはアルヴァ・アールトの設計によりフィンランドを代表する音楽ホールとして1972年に開場してから国民に親しまれています。



ヘルシンキ駅に程近いトーロ湾に隣接し、ランドスケープに配慮した白い現代的なデザインの建物は自然景観と一体をなしたフィンランドのシンボリックな建築です。国会議事堂にも近くコンサートだけでなく国際会議場としても利用されています。大ホールは内装に木材を多用し落ち着いた雰囲気と素晴らしい音響を提供しています。



#### B. シベリウス・ホール ラハティ市

ヘルシンキの北100Kmほどのラハティ市にあるシベリウス・ホールは、既存のレンガ造りの家具工場をリノベーションし、モダンなデザインの全面ガラスのカーテンウォールを持つホール部分を増築しています。古いレンガ造りと近代的なガラスの外壁の調和が美しい建物です。

ロケーションはヴェシヤルヴィ湖の南端に面し、周辺の景観と調和しています。

設計はキンモ・リントウラ&ハンヌ・リテイックにより2000年に改築建造され、フィンランドを代表する作曲家のシベリウスの名を持ったこのホールは地元のラハティ交響楽団の本拠地になっています。

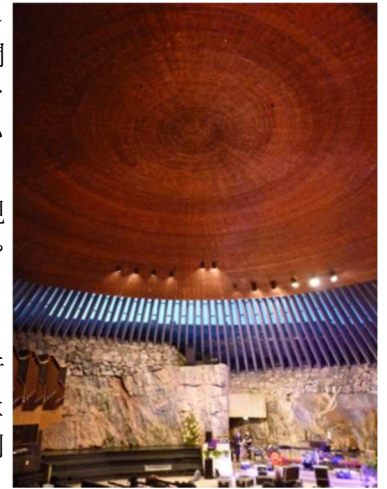


**C.テンペリアウキオ教会 ヘルシンキ市**

ヘルシンキ市の中心近くにあるテンペリアウキオ教会は「石の教会」として良く知られています。氷河時代の岩盤をくり抜き円形の屋根を掛けその間に採光用のガラスをはめた一見教会と判らないような特徴的な建築はスオマリネン兄弟の設計により1969年に完成しました。外部は岩盤に囲まれていて岩をよじ登ると屋根の近くまで容易に近づけることができ、周辺から見ると岩山に屋根が乗っているような景観をなしています。岩の間には樹木や花々が咲き自然と一体化した調和のとれたランドスケープとなっています。



この教会はミサや結婚式等の教会の行事だけでなく、岩盤に囲まれた空間は音響効果に優れコンサートでもよく利用されています。



**D.セント・ヘンリー・アートチャペル (サンクトヘリス教会) トゥルク市**



ヘルシンキの西100Km程にあるトゥルク市は西部の都市として古くから栄え首都がヘルシンキに移る前の中心都市でした。船底のような変わった形をしたセント・ヘンリー・アートチャペル (サンクトヘリス教会) は、マッティ・サナクセンアホを主としたグループの設計により市街地の外れの湖の近くの松林の中に2005年に建設されました。隣接地には癌専門のホスピス及びリハビリ施設であるメリカリナ・サーヴィス・センターがあります。



**E.カンピ礼拝堂 ヘルシンキ市**

ヘルシンキのカンピ・ショッピングセンター兼バスターミナル前の広場に忽然と建つカンピ礼拝堂は2012年にK S 2建築事務所の設計で完成しました。多くの市民や観光客が行きかう広場の入口近くに、円形の木材でできた外壁の建物は一見教会とは思えぬデザインで無機質な広場にも調和が取れているような気持ちになります。曲線だけで出来た建物は入口を探してぐるぐる廻る人を見かけますが、ひと回りして入口を見つけた人は安堵の表情を持って教会内に消えて行きます。フェルトのクッションが置かれた内部にはキャンドルが灯り一定の宗教に所属しない瞑想的な祈祷空間になっています。



## 「かのや100チャレ」

NPO法人日本景観フォーラム  
吉川謙太郎

「首都圏の中高生が考える『鹿児島県鹿屋市が抱える100の課題』チャレンジ事業」（愛称：「かのや100チャレ」）は、首都圏の中高生たちが、鹿屋市が抱える多くの課題のうちのいくつかをとりあげ、その解決に向けて自分たちにどのようなことができるのか、議論し、実際に行動しているというものです。

現在、私の勤務校である湘南学園中高を含め、7校程が取り組んでいます。本校では、8名（高校1年生3名、中学2年生5名）の有志生徒が放課後などに自主的に集まって活動しています。

この取り組みは、年度ごとの区切りがなく、課題が解決する（あるいは途中で頓挫する）まで続いていきます。教員から見ると、「課題解決型学習」（PBL）を地でいくような、まさに、いま進められている教育改革でも重視されている「思考力」「判断力」「表現力」などの育成にもつながる大変興味深い取り組みです。



また、この事業の事務局を務められている方は、次のように語られています。

「かのや100チャレ」は地方が抱える課題を首都圏の中高生が解決するプロジェクトです。通常、地域活性では特産品や名所旧跡などおいしいものや、珍しいものを紹介し、地域に来ていただくことを目的としますが、「かのや100チャレ」はその逆を行っています。

地域の抱える”問題”を特産品として、町おこしを行っています。問題を地域と一緒に考えることで、地域への関心が生まれ、交流へとつながります。問題はどこにでもあるものです。特に、真に地域活性化を求める地域には山積みです。

これが実証できれば、日本中、世界中の地域活性化ができる！そう願い、取り組んでいます。



私は、「地域活性化の思い」と「学校教育の思い」が、1500キロの距離を越えてピタリとつながったのかな、と思っています。

さて、昨年7月31日に第2回発表会があり、本校生徒は「かのや深蒸し茶と湘南学園」と題する発表をしました。その際の審査員は副市長と「ふるさとPR課」の職員の方々でしたが、光栄にも「審査員特別賞」（副賞は、「最優秀賞」の学校と共に、鹿屋市褒賞旅行！）をいただくことができました。

<本校HP参照；<http://www.shogak.ac.jp/highschool/activities/45748>>

### 「かのや100チャレ」第2回発表会

2016年9月3日

7月31日に、「首都圏の中高生が考える『鹿児島県鹿屋市が抱える100の課題』チャレンジ事業“かのや100チャレ”第2回発表会」が東京の世田谷学園で行われました。

[<第1回発表会の記事は2016年2月23日>](#)

本校では、新たに3名の生徒が加わり、合計8名<高1が2名、中2が6名>で活動をしています。

前回掲げた「『かのや深蒸し茶』を世界へ」という最終目標は変わっていません。しかし、いきなり「世界」では難しいので、まずは、学校内で、お茶も含めた鹿屋市そのものの魅力をアピールしていかないと考えました。

その一環として、カフェテリアの皆様のあつい協力を得て、「からいもねったぼくサツマイモと餅を使



その後、11月15日には、日本橋にある「地域活性化センター」での発表もすることができました。

<<http://www.shogak.ac.jp/highschool/activities/47018>>

そして、11月25日には、本校のカフェテリアにて、「鹿屋特別メニュー」の出食を実現しました。

<<http://www.shogak.ac.jp/highschool/activities/47145>>

そのような中、12月26日～28日にかけて、代表生徒2人と共に、鹿屋市褒賞旅行に行ってきました。主な内容を列挙します。

#### 12月26日

「市長表敬訪問」

「市庁舎での発表会と交流会」

#### 12月27日

「鹿屋市内の戦跡めぐり」

「鹿屋航空基地資料館（特攻の歴史等を学ぶ）」

「菅原小学校（廃校）の視察（イベント・宿泊施設としての再活用ができないか考える）」

「鹿屋漁協との交流」

「鹿屋女子高等学校との交流」

「民泊（生徒のみ）」

#### 12月28日

「民泊先での農業体験（生徒のみ）」

「かのやバラ園見学」

「鉄道記念館（廃線となった大隅線について学ぶ）」

このように、とても濃密な時間を過ごすことができました。後日、本校HPに、生徒たちのレポートを掲載する予定ですので、ご注目いただけたらと思います。

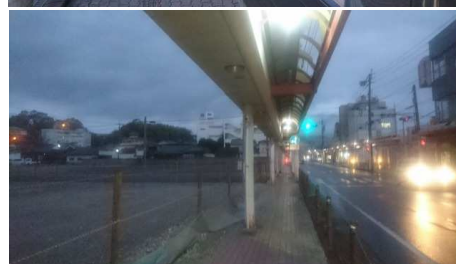
ここでは、私が感じたことをいくつか、簡単に申し述べたいと思います。

### ① シャッター通り

鹿児島空港から鹿屋市に入る主要な公共交通機関はバスです。1時間20分程で鹿屋バス停に到着します。そこから、鹿屋市役所まで10数分歩いてみたのですが、その道路沿いが、まさに、シャッター通りでした。

夕方にも歩いてみたのですが、アーケードの電気だけが付いているような状況です。近くの寺院の鐘の音が聞こえてくるにおよび、寂寥感がいやがうえにも高まりました。

歩きながら、生徒たちは、自動車の通行は多いことに気づきました。シャッター通りが生まれる一因について、体感的に学んだ瞬間であったと思います。



### ② 戦跡めぐり、鹿屋航空基地資料館

鹿屋にはかつて海軍の基地があり、多くの特攻機が飛び立った地でもあります。数でいえば、有名な知覧からよりも多く出撃しました。現在も海上自衛隊の基地があることや、交通の便があまりよくないことなどからでしょうか、知覧と比較すると、あまり宣伝もされず知名度が高くないように思えます。「ダークツーリズム」的な題材としては申し分ないので、他地域の戦跡などともあわせて、中高生向けのツアーができないかと思いました。本校で毎夏行っているアウシュビッツを訪れるツアーもそうなのですが、「戦前」ともいえないような今こそ、特に必要な学びになると強く思います。

### ③ 食事が美味しい！！

「黒豚」「カンパチ」「紅はるか（とても甘くて美味しい『さつまいも』）」「かのや深蒸し茶」、芋焼酎・・・ともかく美味しかったの一言です。帰宅後、迷わず「ふるさと納税」のHPを開きました。



この旅行を通じ、現地に行き、全身でその土地を感じることを大切に改めて認識することができました。特に、生徒たちにとっては、大いに刺激になったようで、現地で収集した情報やつながりをフル活用して、取り組みを継続・発展していきたいと意気込んでいます。

2月18日には、本校で、「鹿児島県鹿屋市の魅力発見！（仮）」といったイベントも予定しています。これも後日、HPに掲載します。是非、いらしてください。

## 良き景観があるところに良きコミュニティが存在し、 良きコミュニティは良き景観を創造する

2017年、新しい年が始まりました。「日本景観フォーラム」にご縁をいただいて早や数年、冒頭の言葉は、いまや私の標語です。今日は、不動産関連の仕事に携わってきた職業人の一人として、「**良き景観再形成の大チャンスが来た！！**」ことをお伝えします。

今、不動産業界は活況を呈すると同時に、頭を悩ます大問題に対峙しています。

**活況の主演は、大都市の優良高規格ビルを中心とした投資市場です。**J-REIT（不動産投資信託：不動産運用利益を投資家に分配する金融商品）の資産規模は昨年15兆円に達し、米国について世界第2位の規模。昨年、国土交通省主催の「不動産投資市場政策懇談会」で2020年頃にはREIT等の不動産資産規模を30兆円に拡大すると発表されました。成長が見込まれる物流施設、ホテル、高齢者向けヘルスケア施設など旺盛な不動産向けインバウンド投資（売買ベースで50%前後が海外資本で推移）を更に促進し、高品質な都市インフラを持つ国、国際競争力ある都市づくりに一意専心の様相です。こんな中、優良中古ビル等の実物不動産の取得競争も激しく、私のところへも色々な会社から依頼の電話がかかってきます。しかし賃貸ビルでありさえすれば良いわけではなく、老朽化した中古ビルには、耐震化の課題や、ニーズの不一致でテナントが入らないなどの事情で取り残されたビルも多くあります。いずれにせよ、人が織りなす活動空間としての機能やその活動を高める背景装置である建物や周辺環境の魅力の度合いが、明暗を分けていることには違いないでしょう。

一方、**大問題とは、「空き家」です。**2013年の統計では、全住宅数のおよそ7戸に1戸が空き家。現在、日本国内の全住宅・宅地資産の約半分以上を60歳以上の方が保有しており、空き家は今猛スピードで増え続けています。空き家は、キチンと管理されないと防災面や衛生面だけでなく景観が悪化するなどの迷惑装置へと化します。実際に突然崩れて危険を招いた例もあります。そこで政府は業界と一体となった大改革ともいえる対策を始めました。取壊しや改修の補助やアメとムチの税制、各自治体、不動産業界、リフォーム業界、NPO法人、クラウドファンディング（インターネットで多数の小口資金を集める仕組み）による資金調達の多様化、IT技術を不動産ビジネスに活用したReal Estate Teckなど総動員して、**空き家や空き店舗などを再生する一大ムーブメントを起こす**仕掛けが進展しています。

さて、それで何ゆえに「景観再形成のチャンス」なのでしょう？

### 不動産投資市場について。

冷徹に投資分析を行う世界で新しい動きが出ています。「外苑西通りビル」や「ホテル・イルパラッソ」など有名な建築作品をREITが取得しました。「美」は高い付加価値を内包している（=賃料、宿泊費など利用料収入などに反映される）との判断がなされたからでしょう。投資口を購入するにあたって、文化的価値の高い建物が組み込まれているものを投資家自らが選択する時代が来たと思うのは早合点でしょうか。

### 一般の実物不動産の世界について私の経験から。

- ・銀行のオフィスだったスペースを流行りの飲食店に。思い切ったコンバージョンにより活気を創出し続けています。
- ・老舗企業の本社ビルだった古ビルを見た経営者が言いました。

**「安川さん！ここをこんな店にすると月〇〇〇〇人、年間〇〇〇〇人の人が喜ぶよ！！」**心に響きました。その後、その言葉通り、毎日多くの人の笑顔でいっぱいになりました。

新たなビルオーナーにチェンジした時や、新しいプレイヤーやアイデアが加わるときにまさに化学反応が起きます。街づくりは、こんな個々の化学反応の積み重ねで出来ているとつくづく感じます。

## 大問題の空き家も都市部の空きビルも景観再形成の大チャンス!!

「空き家対策」に政府と業界が本気で乗り出したことは前述のとおりです。空き家バンクなどマッチング事業などこれからもっと本格化します。また、旺盛なインバウンド需要を満たすため宿泊施設への転用も高い期待が寄せられています。空き家は、国や自治体の応援も得て、新たな住人への提供、宿泊施設、地域の集会所、店舗、展示スペース、創作活動の場、NPO法人の活動拠点、公園など様々な空間に生まれ変わるのを待っている状況です。

また、都市部の中古ビルも、新サービスを提供するスペース造りが盛んです。シェアオフィス、シェアハウス、簡易ホテルなど同じ価値観を持つ人たちのコミュニティの場がたくさん出来てきました。

さてこの国をあげての一大プロジェクトは、日本の歴史的文化的な風景や価値から目が離れてしまった時代から、その素晴らしい価値を再発見、再定義し次代へと残すための大チャンスです。景観再形成があちこちで行われます。この一大プロジェクトや大きなトレンドの中で、大改修が行われた結果、トンチンカンな景観になったのでは意味がありません。

一つ一つのプロジェクトが、その土地の風土や歴史、地域のあらゆるリソースを最も引き出し、住む人訪れる人みんなが喜ぶものとなって、その集合体である街全体の魅力が高まり、更に洗練されていくよう、私たち「景観から考えるまちづくりメンバー」の出番も多くなることでしょう。

安川久美子

### 【参考ホームページ】

- ・国土交通省「空き家再生等推進事業」(概要)  
<http://www.mlit.go.jp/common/001091836.pdf>
- ・三井住友トラスト基礎研究所「建築作品×不動産ファンド」  
[http://www.smtri.jp/report\\_column/info\\_cafe/2016\\_11\\_02\\_2429.html](http://www.smtri.jp/report_column/info_cafe/2016_11_02_2429.html)



## &lt;LFJブックレビュー51&gt;

## 『風景の思想』西村幸夫編 西村幸夫・他著 2012年刊 学芸出版社

本書は「風景を巡る多様な言説をとりまとめることを通して、ふだん身近に接しているなにげない山水の情景や文脈なく続いているように見える都市の乱雑な景観も、立ち止まって目を凝らすと、その背景には細やかな論理があり、あるいは長い風景感受の歴史があることが実感を持って理解できるのではないだろうか」という西村の考え方の下に、12人の多方面の分野に亘る著者による、思考の集積である。景観を論ずる前に、先ず風景の源から始めてみようという観点である。

第1部は「日本人の風景の思想」と題し、第1章は日本中世史専攻の五味文彦による「風景の中世史」である。日本人が如何に都市というものを感じ取ってきたか、その都市が生活の中にどのように生かされていたか、そして、その都市が衰退と復活をどのようになしうるか、等を論じる。第2章は美術史専攻の大久保純一による「広重に見る江戸の都市イメージ」である。広重の『江戸名所百景』を紐解きながら、当時の江戸という都市が人々に与えて来た影響を論じる。第3章は民俗学専攻の伊藤廣之による「風景のフォークロア」である。街角に残る巨木と都市の記憶を通して、都市とそこに住む人間の関係を考える。

第2部は「場所の風景とその思想」と題し、第4章は都市工学専攻の中島直人による「郊外の風景」である。文明・文化の表象として都市がどのように立ち現われるかを論ずる。第5章は建築学専攻の温井亨による「地方の中心商店街と中山間地域の風景」である。暮らしの風景とは何か、その現状と今後を論じる。第6章は農業改良普及運動を実践してきた宇根豊による「農と風景」である。風景としての百姓仕事の発見を論ずる。第7章は都市工学専攻でこの書の編者でもある西村幸夫による「都市計画による風景の思想」である。20世紀の都市の誕生を論じる。

第3部は「景観づくりの実践とその思想」と題し、第8章は地域計画専攻の井上典子による「文化的景観と風景」である。生活・生業の風景がどのように持続され継承されるのかを論じる。第9章は土木工学専攻の島谷幸宏による「河川風景の思想」である。環境デザインを中心に河川の改良からまちづくりを論じる。第10章は農学専攻の深町加津枝による「身近な自然と風景」である。里地里山の再生による風景づくりを論じる。第11章は土木工学専攻の中井祐による「生きた風景へ」である。公共空間デザインの現代的意義を考察し景観まちづくりを論じる。第12章は哲学者の桑子敏夫による「豊かな景観づくりへの哲学」である。最終章として自己の環境哲学から豊かさとは何か、風景を通して人生を豊かにしてゆく“風景道”と称する哲学を提唱する。

さて、景観まちづくりは以上の諸論文からも多種多様な切り口があるだろう。しかし、唯一重要なポイントがある。それは、景観の豊かさはダーウィニズムの“進化”概念では考察不可であり、また、GDPという物差しでは観測不可能ということである。景観の豊かさはコミュニティの豊かさと深い関係にあり、それは人々の生業と風景に根付かざるを得ないであろう。  
(斉藤全彦)



## 天地玄黄 ⑫ 「“景観”について考える」

「景観」って、改めて考えてみると何を指すのだろうか？  
……という、実に初歩的な質問について、簡単に調べてみる事にした。

最近の世の中は便利で、電子辞書やインターネットを使えば複数の辞書の記述を確認できる。その恩恵を十分に活用して簡単に検索を試してみた。

電子辞書で広辞苑・大辞泉・明鏡・パーソナル現代国語辞典・ブリタニカ百科事典の展覧を、インターネットで世界大百科事典と大辞林の記述を見てみた。

広辞苑・大辞泉・明鏡・大辞林は「風景」「景色」「ながめ」と書いている。一般的な認識としてはこうなるのだろうか。「人を引きつける（明鏡）」とか「すばらしい（大辞泉）」と書いてあるので、ただの景色や眺めではなく、心奪われるような景色であり眺めを指すのだろうか。

確かに、私自身も「景観」というと風景（ただし、建物が入る）を思い浮かべる。



だが、用例を見ていると、  
「アルプスの大景観に触れる（大辞林）」  
「雄大な景観（広辞苑）」  
と出てくる。

どういう事なの。

どうやら、私の認識が誤っていたのかもしれない。  
いままでのところをもう一度考え直してみよう。

今まで見てきた「一般的な国語辞典」（広辞苑や大辞泉を一般的と言っていいかどうかはさておき、電子辞書で調べられるのでそう言う事にしておく）は、あくまでも「見た目」にしか言及していない。いや、ここはむしろ、流石国語辞典。言葉を使う上での定義のみで、「その景観が風景とどう違うのか」は領分ではないのだろう。

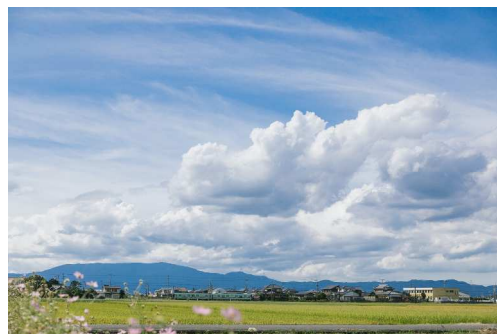
よって、一般的な言葉の用法として、景観とは、ともかく「良い眺め」「人が心地よいと感じる見た目を持った場所」という事か。それであれば、「アルプスの景観を眺めて感嘆のため息をついた」という事が言えるのだろう。あるいは「富士山からの景観」とも言える、と。ご来光とか綺麗そうだなものなあ。

話がそれました。

百科事典系はきっとその言葉の成り立ちまで書いてくれている！  
という事で読んでみたところ、気になる言葉を見つけた。

## Landscape

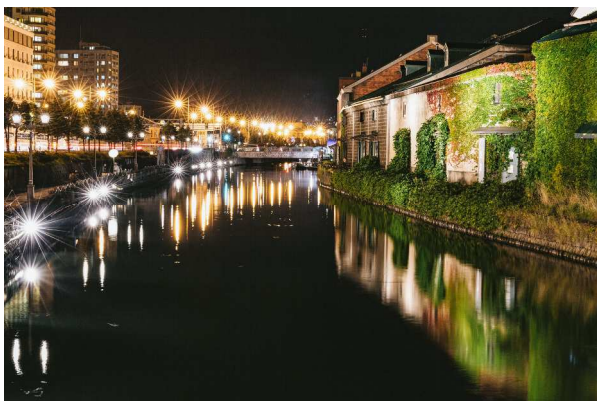
である。英語だとLandscapeなの。それなら、建物は確かに関係ない。むしろ、Landscapeは建物の無いところにこそ使いたくなる言葉ではある。建物はあっても構わないが、Sceneryよりも、より「場所」にスポットライトが当たるイメージがある。ブリタニカによると、「一定範囲の地表空間、すなわち目に生じる景色、または風景を指す」とのこと。目に映る「空間」なのか。



目に映る空間となると、またややこしい。  
でも、これで少しすっきりした。

つまり、景観とはそれが自然景観（自然物で形成された景観のこと。アルプス山脈の景観はこれにあたるんだろう）であれ、人文景観（人間の生活によって形成された景観のこと。京都の景観などはこちらだろう）であれ、とにかく写真で切り取り得る空間という事じゃないだろうか。

空気まで感じる、とは景観では求めていると思う。その場所の見た感じの率直な様子をきっとしめすんだろう。



というのが、私個人の簡単かつ単純化した解釈なのだが、百科事典によると地学分野でも使うらしく、それについて考え始めてしまったらいつまでも終わらなさそうなので、今回はこの辺りで区切ろうと思う。Landscapeの事然り、自然景観・人文景観しかり、細かく見ていくといやはや、奥が深い深い。調べ物にすらならない、検索で終わるなどと侮ってしまっただけで申し訳なかったです。

ちょっとした調べ物にはなりそうなので、夏休みの自由研究にいいかもしれない、などと冬に思うのであった。

Meg

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : [info@keikan-forum.com](mailto:info@keikan-forum.com)

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan